

# 行政視察等報告書

平成31年3月4日

境港市議会  
議長 柗 康弘 様

会派名 自民クラブ  
荒井 秀行



下記のとおり行政視察・研修を行ったので、その結果を報告します。

## 記

1 視察等期間	平成30年10月15日(月)～平成30年10月16日(火)
2 視察等先及び内容	<p>○場所：全国市町村国際文化研修所(滋賀県大津市)</p> <p>○研修概要</p> <p>【平成30年度トップマネジメントセミナー～未来に向けた挑戦～】</p> <p>①「人口減少時代の大都市経営」 神戸市長 久元 喜造 氏</p> <p>②「“いいもの”を編む～気仙沼ニッティングの挑戦～」 (株)気仙沼ニッティング 代表取締役社長 御手洗 瑞子 氏</p> <p>③「街全体で人々を看守る新しいまちづくり ～CBMCヘルスケアイノベーションIWAOMODEL～」 京都大学経営管理大学院特定教授、高齢社会街づくり研究所顧問、 医師・医学博士・MBA 岩尾 聡士 氏</p> <p>④「知と汗と涙の近大流コミュニケーション戦略」 近畿大学 総務部長 世耕 石弘 氏</p>
3 視察等議員	佐名木 知信
4 総経費	合計 19,730円(一人あたり19,730円)
5 所見等	別紙

## 5 所見等

### ①『人口減少時代の大都市経営』

講師：神戸市長 久元喜造氏

◇神戸市の成り立ちから大都市と近隣市の制度設計上の違い、産業インフラへの投資や維持費への歳出が多い事など、数字を交え具体的な説明を受けた。

財政力指数と住民税の占める割合は相関関係がある事、逆に法人税率との相関関係はない事を示した上で、如何にして多くの人から自治体として選んでいただくか、また市民の所得を増やしていくのがカギになるとのこと。神戸市には教育力という知名度・ブランド力を活かしたシティプロモーションや、学生に対し三ノ宮駅周辺の物足りない点など、フィールドワークで課題を抽出し、改善・魅力アップにつなげた事例が紹介された。また、地域との協働と同様に重要なことは、市役所職員を外に出していくとの視点から、神戸市では「高齢者部分休業制度」や「地域貢献応援制度」を設けて職員の後押しをしている。

都市経営には若者や外部の視点を入れることや、仕事内容を精査し職員の労働内容を見直しながら住民サービスにつなげる視点が大切だと感じた。

### ②『“いいもの”を編む～気仙沼ニットイングの挑戦～』

講師：(株)気仙沼ニットイング 代表取締役社長 御手洗瑞子氏

◇東日本大震災発生後、街で最初に目につくのは建物・インフラの破壊等であるが、実は、そこに住む人々の生活サイクルが破壊されている事の方が深刻であった。

そこで、気仙沼の人の生活を支え、世界に発信できるものとして編み物を選んだ。その背景には、気仙沼は漁師まちであり、漁網を修繕するなど編み物が多い土地であった。また、世界に発信するものとして値段は高く(オーダーメイドで一着15万円程度)とも、編み上げるのに平均50～60時間を要することへの対価としてふさわしい価格設定にした。創業当初4着のオーダーメイドを募集したところ、100件近い依頼があり、事業として成り立つことを確信した。

今まで復興支援を受けていた中で、何をすることも「すみません、助かります」「ありがとうございます」と肩身の狭い思いをしていた気仙沼の人にとって、初年度から黒字経営できた事は「納税できる」「喜んでもらえる」と、やっと胸を張って歩けるようになったとの事であり、最初4名で始めた事業が、今では編み手が70名を超える企業となった。

印象的だったのは、70名を超える編み手の方たちの多くが、介護や子育て・家事を担っており、決まった時間に働くというより自分が出来る時間に作業し納品している点である。現在、働き方改革が進められる中、単に定年を伸ばすだけでなく、働きたいけど働けない方への施策が求められていると感じた。

③『街全体で人々を看守る新しいまちづくり～CBMCヘルスケアイノベーション I W A Oモデル～』

講師：京都大学経営管理大学院特定教授、

高齢社会街づくり研究所顧問、医師・医学博士・MBA 岩尾聡士氏

◇人口減少と高齢化率の上昇により、日本では2025年に75歳以上の人口割合が16.7%（6人に1人）に転じるとの予測が出ている。平均寿命が約85歳と人生90年時代を迎え、医療と介護の両方が必要な高齢者が増加するため、こういった状況に柔軟に対応できる仕組みが必要となる。したがって、医療と介護が並行して必要となる高齢者が多い社会では、病院は医療面での処置をするところ、介護施設はリハビリや介護をするところというような縦割りではなく、一気通貫の対応ができる施設が必要である。

これからは、住み慣れた街での在宅介護・訪問診療・看護・リハビリ・介護施設の充実した「地域全体で高齢者を見守る街」、「いつまでも健康で暮らせるCCRC “まるごとケアの街”」、病院と同等の機能を街が有しハードとソフトを充実させる「タウンホスピタルI W A Oモデル」の実現が、健康寿命の延伸による就業人口の確保や、ゆりかごから墓場までの健康管理の推進につながると考える。

④『知と汗と涙の近大流コミュニケーション戦略』

講師：近畿大学 総務部長 世耕石弘氏

◇現在、少子化の波により大学の存続をかけて、受験者・入学者の確保に激しい競争を繰り広げられている。その中で、近畿大学の基本的な広報コンセプトは、現状と問題を正しく知り、伝えたい近大の姿を具現化し魅力を発信することである。

「時代とともに常識は変わる」との考えから、近大水産研究所による世界初のクロマグロの完全養殖や、原子力研究所を設置するなど、非常識と言われることもブレずに推し進めることで、今や受験者数全国1位、学生数全国3位と結果に表れるようになる。

コミュニケーションの基本は「伝えた」ではなく「伝わったか」を意識する事、常識や慣例を打ち破る実践的な試みにチャレンジする事の必要性・重要性を強く感じた。